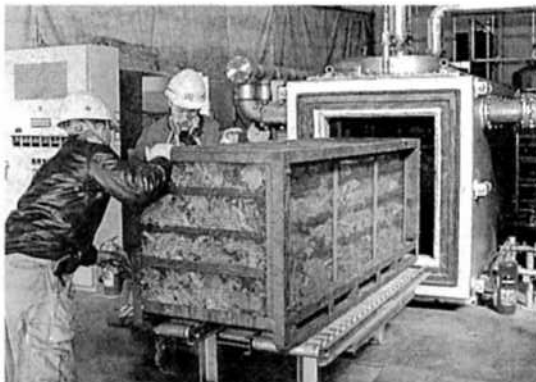


# 燃やさぬ処理で ごみを有効活用

立川市 プラで実証実験



ごみを焼却せずに炭化させる新たな処理装置の導入を目指す。立川市は11日、埼玉県入間市の民間会社の施設にプラスチックごみを持ち込んで

の廃プラスチック処理施設の導入に踏み切る。

排ガス成分の測定などの実証実験を始めた。煙突は不要で、ダイオキシン類や二酸化炭素がほとんど発生しないとされている。導入すれば、全国の自治体では初めての試みとなる。

装置は、文京区の機械メーカー「EEN」が2004年に開発した。ほぼ100%の窒素を電気炉に送り込み、450度程度の熱でごみを分解する。炉内は無酸素状態のため有機物はCO<sub>2</sub>を出さずに炭化し、プラスチック類は燃料の重油として再資源化できる。金属類が含まれていても酸化しないので、そのままの形で分別できるという。

同市では、若葉町にある清掃工場が老朽化し、2008年12月までに移転することを住民に約束していたものの、代替地が見つからず、対応に迫られている。実験によって安全性が証明されれば、議会の同意を得て、1日10ト程度

最大の課題は、発生物の販売が確立していないこと。家庭の生ごみの場合は、脱水・乾燥させるなどの前処理も必要となり、プラスチック類に比べてハードルが高い。

同市の天野正一・清掃事務所長は、「試す価値はある。老朽化した焼却炉の負担軽減にもつながる」と話す。

11日から始まった実験では、市が持ち込んだ廃プラスチック類約30トが処理され、硫

黄酸化物の有無などが委託業者によって分析される。市は5月に開かれる市議会に報告する予定だ。  
(米沢信義)